

今昔物語 第29話

有舌尖頭器

日本の旧石器時代がまさに終わろうとする約一万三千年から一万年前、九州を除く日本全土に有舌尖頭器を主要な道具とする文化が広がりました。有舌尖頭器は、槍の先端に装着する利器で、飛び道具としての投げ槍であったと考えられています。

ヨーロッパでも、後期旧石器時代の終末期に栄えたマドレーヌⅡ期の文化で、有舌尖頭器が発見されています。このような軽量の狩猟具の出現と共に、骨製の投槍器が少なくなつたことも事実で、そこには、弓矢の発明という重要な問題が隠されているのではないかとされています。日本では、骨の保存が悪いという点から投槍器の発見が望めないため、有舌尖頭器がどのような機能をもつた道具として用いられたかについてはまだ解明されていません。

有舌尖頭器の出現とほぼ同時期に、大型の局部磨製石斧の製作が始まりました。旧石器時代の終末

に、樹木の伐採というような新しい仕事が増加した証拠でしょうか。

市周辺の旧石器時代の遺跡の分布は、東は生駒西山麓の中段段丘、北は枚方台地から千里・高槻の丘陵地帯、南は和泉山脈に点在して、その出土遺物（石器など）から見て、その多くは後期石器時代のものと思われま

す。歴史民俗資料館所蔵の有舌尖頭器は、宮谷古墳群から出土したものです。市の生駒・飯盛山西山麓には、周辺他市の遺跡と同様に、後期石器時代から縄文時代前期の遺跡の存在が考えられます。



宮谷古墳群から出土した有舌尖頭器

今昔物語 第30話

弥生式短頸大型壺形土器

市指定文化財第1号

当土器は、昭和33年2月、野崎観音裏山（海拔78㍎）を遊園地として造成中に発見されました。弥生時代後期（3世紀）に属し、高さ62㍎、胴部百三十九㍎、府内出土品としては最大であるばかりではなく、頸部の竹管紋の美は素晴らしく、ろくろも使用しないで制作した技術は見事だといえます。

壺は口頸部を真東にして、水平に埋められていました。中から出てきた人骨は、複数の幼児のもの

であることが判明しました。多分、村里を眺望出来るように心遣いた親が、愛児の遺体を高地に安置したものでしょう。

3世紀ごろの日本列島は、各地に小国家の成立が見られた時代であり、この土器はおそらく経済的・政治的にこの地域で支配的地位にあつた有力者が、我が子を丁寧に弔った壺と考えられています。

巨大さと美しさは、府内随一の定評を受けています。

